

実践報告

「英語発話力向上プログラム (フィリピン)」
オンライン化の経緯と現状報告横川 綾子^AA Report on the Process of Transforming an English Language
Program for Speaking Proficiency in the Philippines to
an Online Study Abroad CourseAyako YOKOGAWA^A

Abstract: This paper is a sequel to the practical report on the hybrid English language program that involves a short-term intensive course in the Philippines, coupled with preliminary online lessons (Yokogawa, 2018). The program evolved to an elective course in 2018, and was implemented as one of the most favored short-term study abroad programs of Meiji University until the spring of 2020. Due to the COVID-19 pandemic, the hybrid English language program had to be transformed into a fully online-based study abroad course, which was successfully conducted in the spring and in the summer of 2021. The purpose of this paper is to describe how the program has accommodated the needs of Japanese university students who would like to develop their speaking proficiency in a short-term elective course, and was implemented online in 2021 under the travel restrictions imposed by the Japanese government. First, the context behind development of the program is outlined. Next, the curriculum design of the program is outlined. Then, the process of transforming the program into a three-week online course is described. The paper concludes with discussions on the significance of online study abroad experience and the future perspectives of the reorganized English language program.

Keywords: online study abroad, travel restrictions, COVID-19 pandemic, speaking proficiency development, Philippines

キーワード: オンライン留学、渡航制限、新型コロナウイルス世界的流行、発話力向上、フィリピン

1 はじめに

最長10年間の事業期間という長期的視野で、高等教育の国際通用性・国際競争力強化を目的として文部科学省が実施する「スーパーグローバル大学創成支援事業」¹⁾は、2021年度で8年目となり、最終局面を迎えつつある。筆者の勤務先である明治大学(タイプB「グローバル化牽引型」に採択)は、柔軟な学事歴の導入、多種多様な留学プログラムの提供、国際学生寮の開設、海外との遠隔授業が可能なメディア環境の整備、学生留学アドバイザーの活動等、国際的な「学びの場」の構築により、令和2年度(2020年度)中間評価²⁾ではA評価を得る等¹⁾、取組を加速している。

同事業期間が残り2年半となった2021年9月、文部科学省は、国際化を牽引する大学間の連携を強化し、コロナ禍を踏まえたニューノーマルの構築を標榜する高等教育の国際通用性・国際競争力のさらなる強化を目的として、「大学の国際化促進フォーラム」³⁾を発足させた。その一プロジェクトである「海外拠点×オンライン×実留学のグローバルシナジー・モデルの構築」の幹事校に、弊学が選定された。世界規模のコロナ禍を経て、地理的・物理的条件にとらわれないユビキタスな学びの場の拡充が求められており、オンラインプラットフォームの活用は、国内外の大学においてさらに進むものと思われる。

本稿で報告する「英語発話力向上プログラム」は、スーパーグローバル大学創成支援事業の一取組とし

A: 明治大学国際連携機構

て、「実践的英語力強化プログラム」(2013年度～2017年度)、「留学志望者対象英語プログラム」(2018年度～2020年度)、「海外留学プレ・ポスト英語プログラム」(2021年度以降)の講座として、開講されてきた。2020年度は政府による渡航制限を受け、夏期実施を中止、春期は全面的にオンラインへと移行し、2021年度夏期もオンラインで実施した。次章以降で、弊学が「英語発話力向上プログラム」をオンライン化した経緯、ならびに2020年度春期実施・2021年度夏期実施の状況を詳細に報告する。むすびに、オンライン留学の意義と本プログラムの今後の方向性を論じる。

2 「英語発話力向上プログラム」の実施状況

2.1 プログラム開発の経緯

「英語発話力向上プログラム」は、「実践的英語力強化プログラム」の枠内で、渡航前オンラインレッスンとフィリピン・マニラでの短期集中研修を組み合わせたハイブリッド型プログラムとして、2017年に開発された(横川, 2018)⁴⁾。2017年に2回行ったモニター実施(1回目4週間10名、2回目3週間13名・6週間10名)では、学生は渡航前に4週間のオンライン英会話レッスンを受講し、渡航後、派遣先のエンデラン大学での1日8時間・週5日のレッスンに臨んだ。

2018年度からは、改称された「留学志望者対象英語プログラム」内の「海外語学研修講座(英語)」として単位付与を伴う正規科目となった。以降、長期休暇を利用し、3週間または6週間で短期集中的に発話力を向上させたい学生のニーズに答えてきた。表1の通り、2019年度まで、每期30～40名の学生が参加し、英語発話力向上に努めている。本プログラムを受講した後、TOEFL iBTやIELTSの受験準備をして中・長期海外留学の出願に進む学生が毎年一定人数おり、弊学の留学派遣ポテンシャルの向上に寄与している。

なお、正規科目化に伴い、モニター実施に組み込まれていた渡航前英会話オンラインレッスンが、受講生の任意受講とされ、代わりに、正規科目としての事前・事後学習が課せられた。効果測定のため、大学の経費負担により渡航前後に実施したTOEIC Speakingは、2018年度の正規科目化に伴い、受講

表1 「英語発話力向上プログラム」実績

	夏期	春期
2018年度	3週間：18名 6週間：8名	3週間：24名 6週間：18名
2019年度	3週間：34名 6週間：13名	3週間：23名 6週間：19名
2020年度	中止	3週間：11名
2021年度	3週間：24名	(2022年2月実施)

※2020年度以降はオンライン実施

生の自己負担かつ任意での受験となった。英語能力に関する応募要件は設けておらず、自己申告による受講前のCEFRレベルは、每期、B1(TOEIC L&R 550～780)⁵⁾が大半である。

2.2 2019年度までの実施状況

派遣先でのメインプログラムのカリキュラムは開発時から一貫して変わらない。マンツーマンレッスンと習熟度別グループレッスンとを交互に組み合わせ、8時間授業を週5日、3週間または6週間実施する。エンデラン大学が独自に開発したテキストを使用し、学生の習熟度に合わせた指導を行う。特に発音の個別指導は学生満足度が高い。授業時間外には、現地学生との交流イベントを開催し、週末を利用したフィールドトリップを実施する等、学生交流や異文化理解の機会を提供している。

学生は、キャンパスから徒歩10分圏内の学生寮に同性2名の相部屋で滞在する。フィリピンでは都心であっても、下水道や電力供給のインフラ整備が十分でないため、学生は、排水やシャワーの水温の不備を嘆くこともある。当初戸惑っていた学生も、滞在期間が長くなるにつれ、異文化体験として受け入れ始める。寮には食堂がないため、食事を調達するのはキャンパスの向かいにあるショッピングモール内のフードコートやスーパーマーケットとなる。食文化の違いを体感しながらも、食費の安さには満足する声が多い。

平日はキャンパスに籠って英語漬けの学生達だが、週末はタクシー配車サービスを使い、外出する余裕もある。ただし、キャンパスのあるマニラ中心街を一步出ると治安の問題が顕在化するため、日本語コーディネーターに行き先を事前に届け出る規則になっている。弊学の派遣学生は、短期滞在であっ

ても、現地学生と同様にエンデラン大学の学則（寮生活を含む）に従うことになっており、規則違反1回で嚴重注意、2回で成績がすべて不可、3回で即時帰国と、厳しい運用になっている。学びの質保証と学生の身の安全を第一に考えての管理体制である。

3 オンラインプログラムへの転換

3.1 2020年度夏期プログラムの開催中止

2018年度・2019年度と安定的に実施してきた「英語発話力向上プログラム」は、2020年4月に発出された新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言とそれに伴う渡航制限の影響で、2020年夏期実施を中止せざるを得なかった。

2019年度までは、5月の連休明けに全4キャンパスで説明会を実施し、申込受付から参加者確定までおよそ1か月以内に完了していた。しかし2020年度は、航空券手配の期限が早い6週間プログラムの募集中止を5月11日に決め、説明会の日程を5月下旬に延期し、3週間プログラム開催の可能性を残した。その後も状況は変わらず、5月27日に3週間プログラムの募集も取りやめた。2020年度は、弊学の海外派遣を伴うすべての夏期研修プログラムが中止となった。

7月からは、2021年2～3月実施の春期プログラムの検討に入った。渡航制限解除の見通しが立たない中での準備であったため、現地派遣のみ・オンライン実施のみ・現地派遣とオンラインの並行実施の3パターンを想定し、情報収集に努めた。

3.2 2020年度春期プログラムのオンライン化

従来の現地派遣と新規のオンライン実施とを見据えていた7月下旬に、派遣先であるエンデラン大学から、プログラムのオンライン化が完了したとの連絡があった。そこで、プログラムのオンライン化に関する要望を担当部局内で取りまとめ、派遣先に打診した。要望の詳細としては、まず、学生の疲労度を考慮して、1日の授業時間は合計で5時間が限度であると判断した。次に、授業形式はマンツーマンとグループの両方を維持し、個別指導で集中力が持続しやすいマンツーマンを長くした。また、中だるみを防ぐために、研修期間が3週間のプログラムは開講するが、6週間のプログラムは開講しないこととした。エンデラン大学からは、オンライン実施に

なじまない授業は取りやめ、代わりに、学生交流や、現地学生と一対一での文化理解活動をカリキュラムに含めるとの提案があり、それらを承諾した。プログラムのオンライン化に伴う主な変更点を表2にまとめた。

8月上旬には授業料、最少催行人数、定員、オンラインプラットフォーム、個人情報の取扱い等に関する詳細が判明したため、2020年度春期のオンライン実施が現実味を帯びてきた。そこで、先方にオンライン上のバーチャル視察を依頼し、ClassIn⁶⁾というオンライン授業用プラットフォームの操作性と教育効果を確認することとした。9月17日に約50分間のデモレッスンを担当教員である筆者が受講し、対面授業とほぼ同等の教育効果が見込めると判断した。これらの手続きを経て、プログラムのオンライン化が正式に決定した。

3.3 オンライン化における懸念

オンライン化を進めるにあたり、教育カリキュラ

表2 オンライン化による主な変更点

	現地派遣	オンライン実施
授業時間	1日8時間	1日5時間
授業形式	マンツーマン4時間 グループ4時間	マンツーマン3時間 グループ2時間
研修期間	3週間または6週間	3週間
授業内容	Chatter Box Accent Training Oral Communication Social Club Field Work College Sit-in Cultural Exchange	Field Work ⇒ 現地での活動が必要なため、オンライン実施不可 College Sit-in ⇒ 現地授業の録画視聴可、授業見学は不可 Cultural Exchange ⇒ 現地学生とのマンツーマンで実施

表3 授業スケジュール例

時間	内容	形式
9:00-10:00	Pronunciation & Accent Training	マンツーマン
10:00-11:00	Oral Communication	グループ
11:00-12:00	Chatter Box	マンツーマン
12:00-13:00	昼休み	
13:00-14:00	Chatter Box	マンツーマン
14:00-15:00	Social Club/ Cultural Exchange	グループ/現地学生との交流

※クラスの切り替え時に適宜休憩を挟む
※毎週金曜日に到達確認テストを実施

ムの再編成以外の懸念が、通信環境と授業料であった。台風の多い気象条件と不安定な通信インフラのため、講師と回線が繋がらない状況に対する備えが必要と思われた。今回使用するオンライン授業用プラットフォームでは、管理者が終始各レッスンルームをモニタリングできるため、講師の通信アクセスに問題がある場合は、即時に代講を手当てするとのことだった。この管理システムは、密室化しやすいオンラインレッスンにおいて、重要な役割を果たすと期待された。

授業料に関しては、現地派遣の場合と同レベルに抑えてもらうよう交渉した。学生にとって、フィリピンへの語学留学はコストパフォーマンスのよさが魅力の一つだが、渡航費・滞在費のかからないオンライン留学の場合、そのメリットを体感しづらい。オンライン化に伴い授業料が上がって割高感が出てしまうと、他の短期オンラインプログラムとの差別化ができず、学生に選ばれにくくなる。結果、インターネット管理会社の回線利用料とメンテナンス費用が計上されたものの、現地派遣型授業料との差額は最小限に抑えられた。

4 2020年度春期オンライン実施

4.1 プログラムの周知と募集

10月に入り、2020年度春期海外研修の派遣中止とオンラインプログラムへの移行が、明治大学国際教育センター内で承認された。他の短期プログラム(オーストラリア・ニュージーランド等)と合わせ、「英語発話力向上プログラム(フィリピン)」の募集が決定した。

募集時期に合わせ、9月28日から10月30日までの昼休みを利用して、「2020年度秋学期オンライン海外留学説明会STUDY ABROAD WEEK ONLINE FALL 2020」⁷⁾が、Zoom上で開催された。その一企画として、本プログラムのオンライン説明会を10月16日に実施し、過去のプログラム参加学生に体験談発表と質疑応答への対応を依頼した。その後、募集を開始し、申込者11名に対し、11月26日に初回オリエンテーションを行った。

4.2 オンラインでの事前学習

2021年2月4日に行った事前学習では、下の4つ

のテーマで、100分間のオンライン授業を担当教員である筆者が行った。なお、授業は録画してアーカイブを残し、オンデマンド視聴を可能にした。

- ・受講生ネットワーキング
- ・オンライン授業を受けるコツ
- ・フィリピンに関する予備知識
- ・事前課題について

学生が孤立しやすいオンラインプログラムでは、受講生同士のネットワーキングが重要となる。まず、Zoomのブレイクアウトルームに分かれて雑談し、自由に連絡先を交換する時間を設けた。オンライン授業を受けるコツについては、プラットフォームの紹介と共に、学習環境の整備の重要性やトラブルの対処法を説明した。フィリピンについては、クイズ形式で、歴史・社会・文化の背景に対する共通理解を促した。学生は、自分の解答をブレイクアウトルームで共有後、教員による解説を聞いた。事前課題として「受講を希望する理由をテーマにした日本語エッセイ」を課し、事前学習終了後72時間以内の提出を求めた。学習目標を言語化することで、目標の達成度を自覚しやすくすることを狙っている。

4.3 3週間のメインプログラム

エンデラン大学によるメインプログラムは、2021年2月8日から2月26日の3週間実施された。表3に示す通り、授業は日本時間9時から15時まで、1時間の昼休みを挟んで午前3時間+午後2時間=計5時間を月曜日から金曜日まで週5日、マンツーマンレッスンとグルプレッスンとを交互に実施した。

講座初日に実施するプレイスメントテストの結果に基づき、グルプレッスン(1グループ4名前後)のレベル分けが行われた。オンライン実施のプレイスメントテストは、語彙と文法の知識を問う多項選択式問題と短いエッセイで構成される。受講生はエンデラン大学専用ウェブサイトで30分間のオンラインテストを受験し、プログラム開始時の英語習熟度がCEFRによる6レベル(A1-C2)で判定された。合わせて、担当講師による個別オリエンテーションがあり、学生はClassInの使用法に関する説明を受けた。事前に学生からリクエストがあったため、日本語版の使用マニュアルも用意した。

開講中に大きなトラブルはなかったが、ClassIn

の操作ミスで講師の声が15分ほど聞こえなかったことがあり、終業後15時以降に補講が実施されたと報告があった。以降、通信障害で授業が中断する等の支障が発生した場合、学生と相談し、振替授業を実施することをエンデラン大学と弊学との双方で再確認した。

事前の申し合わせの通り、メインプログラム終了後3週間以内に、学生の成績表が届いた。技能別の成績に加え、初日のプレイスメントテストで判定されたCEFRレベルと、プログラム修了時の到達度確認で判定されたCEFRレベルとの比較で、学生の学習到達度を評価できる(2020年度春期は1レベル向上6名、現状維持5名)。「海外語学研修講座(英語)」の成績評価では、エンデラン大学が採点した成績を80%とし、事前課題10%・事後課題10%で計100%とした。

4.4 事後学習と学生の反応

2021年3月1日に行った事後学習では、下の4つのテーマで、100分間のオンライン授業を筆者が行った。事前学習と同様、授業は録画してアーカイブ化し、学生と動画の視聴リンクを共有した。

- ・受講後アンケートへの協力
- ・今後の英語学習
- ・異文化理解
- ・事後課題について

受講後アンケートは、2017年度のモニター実施から同じ質問を用いている^[2]。学生は、授業冒頭でGoogle Formsから各自回答を入力した。今後の英語学習については、スピーキング練習法としてVoice Diary(音声による日記)や、30-Second English Commentary(英文記事に対する30秒コメント)等を紹介した。異文化理解では、フィリピン社会と日本社会の違いについて、エンデラン大学の講師から聞いた話や学生自身の見聞をZoomのブレイクアウトルームで共有した。事後課題は、「講座で習得した英語技能をテーマにした日本語エッセイ」を課した。事前課題で設定した目標の達成度を明確にし、今後の英語学習に活かすことを狙っている。

前述の受講後アンケートの結果によれば、授業内容については、現地派遣型プログラムとほぼ同等の評価であった。親身な講師による個別指導や、日本

語コーディネーターの迅速で真摯な対応に多くのコメントが寄せられた。特に伸びたと思われるスキルについても、これまでと同じく、発音の改善と発話力への自信をあげる学生が目立った。現地派遣型プログラムの場合は、フィリピンでの寮生活や社会インフラへの不満が書かれることもあったが、こうしたコメントはなかった。その一方で、時に拒絶感を伴う強烈な異文化体験を提供できないオンラインプログラムの限界も読み取れた。実際、事後学習の際には、次回は渡航して自分の目でフィリピンを見てみたいという声が上がった。

5 2021年度夏期オンライン実施

5.1 プログラムの募集と参加者増

前章で述べた通り、2020年度にオンライン化した「英語発話力向上プログラム」は、11名の修了生を送り出した。2021年4月時点で、短期海外派遣プログラム実施の目途が立たないため、2021年度夏期もオンライン実施の準備を進めた。

5月10日昼休みに、2020年度春期オンラインプログラム修了生1名を迎えて、オンライン説明会を実施した。その後、申込受付から募集開始へと進み、6月3日には24名の参加者が確定した。2020年度のオンライン実施から申込者が2倍以上に増え(11名から24名)、現地派遣時と同規模の参加人数となった背景は、次のように推察できる。

- ・夏期休暇を有効に使いたい学生の受け皿になった
 - ・渡航を伴う留学の代替案として選ばれた
 - ・初回実施の結果からプログラムの質を確認できた
 - ・自己学習のペースメーカーとして需要があった
- 実際に、次節にて述べる事前課題のエッセイの中で、「オンライン留学に懐疑的な部分もあったが、説明を受けるうち、移動時間などに縛られず、周りの雑音を気にせずに、マンツーマンの講義を受けることができる本プログラムのメリットを感じた」との意見があった。

図1・図2に示す2020年度春期・2021年度夏期プログラム参加者の学年別内訳をみると、2020年度春期では1割未満だった1年生が、2021年度夏期では過半を占めている。入学直後に対面授業からオ

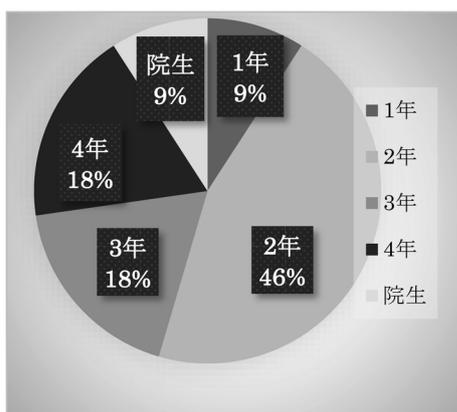


図1 参加学生の学年別内訳：2020年度春期

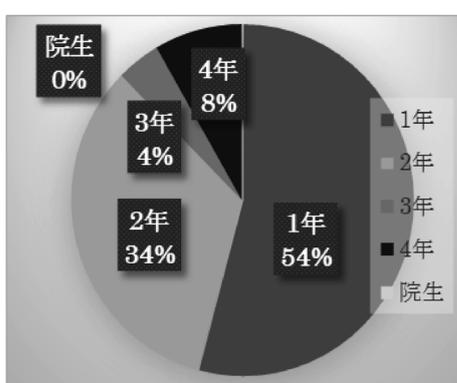


図2 参加学生の学年別内訳：2021年度夏期

オンライン授業への切り替えを余儀なくされた2020年度入学生と比べ、2021年度入学生は、移動・渡航制限を前提にしたオンライン授業やオンライン留学に対する心理的な抵抗感が少なかった可能性がある。

5.2 事前学習とメインプログラム

事前学習は、前回とほぼ同一内容で8月3日に行われた。だが今回は、弊学国際教育センターが実施するオンライン留学プログラム参加者を対象にした「国際性、異文化理解に関するアンケート（28項目6件法）」への協力を、受講生に依頼した。約1か月後の事後学習でも、同一のアンケートに協力を依頼した。

その後、メインプログラムは、8月9日から8月27日まで3週間実施された。途中、体調不良を申し出た学生2名のうち、1名は履修を中止し、もう1名はプログラム期間終了後、マンツーマンレッスンの補講を受けることを選択し、9月17日に全課程を修了した。また、担当職員が行った事後アンケートに、授業内容に不満を述べる学生が2名いたため、派遣先に実態調査を依頼した（第6章にて詳

説）。調査終了後、エンデラン大学から、プログラム期間終了後に当該学生2名に補講を提供する申し出があったため、希望する1名に対して補講を実施した。9月中旬に届いた全受講生の成績表では、CEFR 2レベル向上1名、1レベル向上9名、現状維持13名（1名受講中止）であった。

5.3 事後学習と学生の反応

事後学習は、8月31日にオンラインで行われた。2020年度春学期と異なり、プログラム終了直後、別のプログラムへ参加するため、2名の学生が欠席した。事後学習では、2020年度春期とほぼ同一の内容で実施したが、異文化理解では、新たにエリン・メイヤー氏によるカルチャー・マップ⁸⁾を用い、比較文化的視座の一例⁹⁾を紹介した。

アンケートでは、講師の熱心な指導やコーディネーターの親身なサポートに対する評価は相変わらず高いものの、通信環境の悪さを指摘するコメントが、前回よりも目立った。現地フィリピンは、7月から11月頃まで雨季に入るため、12月から5月と言われる乾季に行われた前回のオンラインプログラムよりも通信障害が起きやすい気象条件であったと推察できる。

6 プログラムの定着と今後の展望

6.1 オンライン留学の意義

コロナ禍の長期化が懸念され始めた2020年夏以降、世界の高等教育機関は、オンライン留学の仕組みを本格的に整備し始めた。以降、オンライン留学に挑戦する学生が徐々に増え、2021年に入るとオンライン留学は、留学の一形態として認知され始めた。

文部科学省が2021年3月16日から3月29日まで実施した「トビタテ！留学JAPAN海外留学に関する意識調査」（文部科学省、2021）⁹⁾によれば、「語学留学」は、オンライン留学プログラムの8つの選択肢の中で、最も多くの大学生から「興味がある」（69.9%）との回答を得た。同調査では、オンライン留学への懸念を問う質問に対し（ $n=412$ ）、「外国語の習熟度が低くなりそう」との回答は全回答の24%であり、8つの選択肢のうち、第6位の回答数であった。第1位は「海外の異文化・価値観を体験する機会が少ない」で、全回答の55%に上った。

この結果から、渡航を伴う留学の意義が認識されていることがわかる。オンライン留学のメリットを問う質問では($n=412$)、「費用が抑えられる」が6つの選択肢のうち、最も多い回答(63%)であった。

サンプル数の限られたインターネット上のアンケートではあるが、本調査においては、「語学留学は大学生が最も興味を示すオンライン留学の形態であり、異文化体験の機会は限られるものの、オンラインであることで外国語の習熟度が低くなる懸念は比較的小さく、費用を抑えられるメリットを最重視している」との傾向が示されたと言える。大学生にとってオンライン留学は、低コストで外国語能力を身に付ける手段として、今後定着する可能性を感じさせる。

2020年度は、弊学の中・長期留学プログラムのうち、一部はオンラインへと移行した。派遣型協定留学で秋出発(2020年8月出国)を予定していた学生は、受入先のオンライン対応が可能な場合、本人が希望すれば、オンライン留学に切り替えることができた。オンライン対応が不可能な場合、学生は延期または辞退を選択した。オンライン留学は、教職員にとっても初めての試みであり、学生の実体験を少しでも理解するため、2021年1月13日「コロナ禍における『オンライン留学』参加学生座談会」¹⁰⁾を開催した。オンライン留学経験者12名のうち5名が集まり、体験を語った。オンライン座談会の動画と彼らの留学体験記¹¹⁾は、弊学ホームページにて公開されている。

学生が語るオンライン留学のメリットとして、「所属大学と留学先大学の授業を同時に受講することで、内容の比較検討ができた」という意見があった。時差を利用して、日中は国内大学の授業を受け、夜は留学先大学の授業を受けることが可能だったわけだが、これは筆者にとって新しい発見だった。空き時間に仮眠をとるなど、健康維持への配慮は必要だが、短期間であれば可能なオンライン留学の形態であるとの認識を深めた。デメリットとしては、異文化体験や学生交流の機会がなく、仲間づくりの難しさがあげられていた。

6.2 オンライン語学留学の定着に向けて

前節では、オンライン語学留学が定着する可能性を論じた。「英語発話力向上プログラム」は、2021

年度春期もオンライン実施を予定しているが、2022年度以降、海外派遣が可能になっても、多様な学生のニーズに応えるオプションとして、現地派遣型と並行実施する意義はあると考える。本プログラムの場合、オンライン実施に適したマンツーマンレッスンが特長の一つであり、オンラインであれば現地の治安リスクを勘案しなくて済む、15時以降の時間を有効に使える、移動時間を節約できる等の利点があるからだ。

一方で、プログラムの安定的な実施には、通信環境の維持や、密室化しやすいオンライン授業のモニタリングと迅速なトラブル対応も欠かせない。第5章第2節で述べた2名の学生からのクレームは、発音のクラスで文法の授業を展開し続けた講師がいたこと、補講の連絡はあったが実施されなかったことであった。学生の訴えが担当講師に届かず、教務主任や、日本語で意思疎通が可能なコーディネーターとの連携もスムーズに進まなかったため、結果として事後対応となった。

こうした事態を防ぐため、次回からは、週1回、LINEを通じた簡易アンケートを実施し、学生が要望や不満を日本語で表明する定期的な機会を、プログラム実施期間中に設けることとした。現地派遣型プログラムでは、学生がキャンパスに常駐する日本語コーディネーターに相談することで、様々なトラブルを解決してきた。オンラインプログラムでは、コーディネーターに気軽に相談できる人間関係を構築する機会を得づらいため、これまで以上に運営側が学生に働きかけ、未然にトラブルを防ぐ仕組みをつくる。加えて、プログラム運営に問題がある場合の解決フローを、具体的なケーススタディを通じて学生に再認識させることも重要であると認識している。

6.3 今後の展望

「英語発話力向上プログラム」は、2022年度で、正規科目化から5年目を迎える。その間、弊学の短期語学研修としては、最大人数が参加するプログラムへと成長した。2020年度内にオンライン化を完了したことで、新たな学生のニーズを掘り起こすこともできた。今後は、現地派遣型と並行し、日本にいなから英語発話力を向上させたい学生の需要に応えつつ、プログラムの安定運営と質向上を目指していく。

第1章で述べた明治大学が幹事校を務める「大学の国際化促進フォーラム」プロジェクトでは、オンライン学生交流と実留学を組み合わせたモデルの構築を目指し、ASEAN地域をターゲットに英語による交流プログラムを展開していく¹²⁾。本プログラムで英語運用能力に自信をつけた学生が、こうした国際交流の場に積極的に参加し、地理的・物理的条件にとられないユビキタスな学びの場を活用し、国際通用性の高い人材としての資質を高めることを期待する。

注

- [1] 前回の平成30年度第1回中間評価で、明治大学はB評価であった。37の採択大学中、S評価6件（全体の16%）、A評価25件（同68%）、B評価が6件（同16%）という内訳であった。今回の令和2年度第2回中間評価では、S評価が2件増え、A評価は変わらず、B評価が2件減り、全体としては評価が底上げとなった。
- [2] 受講後アンケートの質問は次の通りである。
- 1 プログラムに参加した感想を一言で表現してください。
 - 2 プログラム（授業・課外活動・寮生活）について評価できる点と改善すべき点を教えてください。
 - 3 現地講師・スタッフ・その他サポート体制について評価できる点と改善すべき点を教えてください。
 - 4 毎日の予習・復習にかけた時間と内容を教えてください。
 - 5 本プログラムを通じて特に伸びたと思う英語スキルとその理由を教えてください。
 - 6 これから本プログラムの参加を検討する学生へメッセージをお願いします。
- [3] メイヤー氏は、10年以上にわたって行った世界中の経営幹部に対する計18万件以上のインタビューを基に、意思疎通の方法や決断の仕方、リーダーシップのスタイルなどを8つの指標を用いて分析し、日本を含む世界中の国々をマッピングした。

引用・参考文献

- 1) 文部科学省. スーパーグローバル大学創成支援事業: http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/kaikaku/

- sekaitenkai/1360288.htm (2021年10月4日参照)
- 2) 文部科学省. 「スーパーグローバル大学創成支援事業」(平成26年度採択)の中間評価(第2回)について: https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/kaikaku/sekaitenkai/1401770_00002.htm (2021年10月4日参照)
- 3) 文部科学省. 大学の国際化促進フォーラム: <https://tgu.mext.go.jp/forum/> (2021年10月4日参照)
- 4) 横川綾子. (2018). 渡航前オンラインレッスンと短期集中研修(フィリピン)によるハイブリッド型英語発話力向上プログラム. グローバル人材育成教育研究, 6(1), 45-55.
- 5) 文部科学省. 各試験団体のデータによるCEFRとの対照表: https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/117/shiryo/_icsFiles/afieldfile/2015/11/04/1363335_2.pdf (2021年10月4日参照)
- 6) ClassIn. <https://www.ClassIn.com/en/> (2021年10月4日参照)
- 7) 明治大学国際教育事務室. 2020年度秋学期オンライン海外留学説明STUDY ABROAD WEEK ONLINE FALL 2020: <https://www.meiji.ac.jp/cip/from/information/2020/6t5h7p000039s0a1-att/6t5h7p000039s0de.pdf> (2021年10月4日参照)
- 8) エリン・メイヤー. (2015). 異文化理解力. 英治出版
- 9) 文部科学省. トビタテ!留学JAPAN海外留学に関する意識調査概要: <https://tobitate.mext.go.jp/labo> (2021年10月4日参照)
- 10) 明治大学国際教育事務室. オンライン留学体験者による座談会を開催しました: <https://www.meiji.ac.jp/cip/from/information/2020/6t5h7p00003agvlw.html> (2021年10月4日参照)
- 11) 明治大学国際教育事務室. オンライン留学とは: <https://www.meiji.ac.jp/cip/6t5h7p00003agrc0.html> (2021年10月4日参照)
- 12) 明治大学国際連携事務室. 文部科学省が発足させた「大学の国際化促進フォーラム」のプロジェクト幹事校に選定されました: <https://www.meiji.ac.jp/cip/info/2021/6t5h7p00003cb9xd.html> (2021年10月4日参照)

受付日2021年10月4日、受理日2022年1月22日